

# 「もとはこちら」のお話し

33 今月のテーマ 雲間から射す 太陽光線

2009年(平成21年)9月19日(土)



クイックマン 山形県蔵王帰り道の上空

みなもと ぐだい るぐだい  
源は 五大や六大の  
更なる奥の奥にあり  
また更なる  
前の前にある。

(平井謙次著「自己を生かす道」より)

北原ゆり筆

雨上がりに見られる美しいものといえば、七色に輝く虹を思い浮かべる人が多いと思います。しかしそれは別にもう一つ、思わず見入ってしまうほどの、とても美しいものがあります。

それは、雲のわずかな隙間から、何本かの光線が放射状になつて射している、あの光景です。

これは雨上がりだけではなく、夕方などにも時折り見られる事がありますが、太陽と雲が織り成すこの光景は、ただ単に美しいというだけではなく、何か深く私達に考えさせるものがあります。

まずこの何本もの光線ですが、太陽をさえぎる雲の状態によって、それがあつた時は三本に見えたり、五本に見えたりします。

しかしこの太陽光線が何本に見えようと、当然のことながら、光の元はたつた一つの太陽です。

そのことが示すように、私達人間にも種々様々な人がいますが、元をたどれば、それは全く一つのものであるという事です。

私達は、自分と他人は、全く別々のものだと思つて生きています。一人ひとりが別々の肉体を持ち、別々の人生を生きているのですから、そう感じるのは至極当然のことです。

しかし三人だろうが、千人だろ六十億人だろうが、大元はやはり一つのものなのです。

元々は一つのもので、色々な条件のもとで、今仮りに幾つにも分かれ、夫々が別々に存在しているように見えていただけなのです。

ところで、完全完璧な光とは無色透明です。

そして全く当たり前のことですが、無色透明の光は、決してそのみで自分自身を表わすことはありません。

しかしそこにプリズムや水蒸気、チリやほこりなど、何らかの縁となるものを通せば、光の中から赤や青や黄色など様々な色が生まれ、現れます。

そしてまたこれらの全ての色を合わせると、また元の無色透明に戻り、色は消えて見えなくなります。

このことから、無色透明の光の中には、元々色々な色があり、縁によって見えたり見えなくなったりするという事がわかります。

これと同じことで、「肉体を持って現実世界に生きている自分」というものは、もともとは無色透明である大生命、これは神と言ってもいいのですが、神が縁に触れて、姿形となつてこの世に表われ出たものであるということがいえるのです。

先程も言いましたように、無色透明の光がそれ自体で表われることがないように、大生命である神自身が現実世界に姿形を現すという事は、絶対にありません。表われる時には、必ず何らかの縁となるものを通し、個性となる色々な色が付いた状態となつて現れます。

個性があるという事は、完全完璧ではなく、全体の中の一部であり、部分表現をしているという事です。

ですから今どのような生き方をしている人であつても、たとえ悪態醜態をさらしながら生きている人、或いは大悪人と言われるような人であつても、元々は神そのものであり、神である大円満、大完全、大調和、大愛という、光で

言えば完全な無色透明である絶対の幸福というものを、内に秘めております。そしてどの人も皆、その絶対の幸福である本性を表わしたいという共通の欲望を持っています。ですから一人の例外もなく、全ての人が一人残らず幸福を求め、幸せになりたいと思ひ願っているのです。

### 目に見えない自分

先程も言いましたが、完全無色とは透明の状態です。

何の濁りも汚れも無く、色もありません。目で見る事も耳で聞く事もできません。有つて無い状態です。

しかしその完全無色の色が様々な縁に触れることによつて、あらゆる色となり、形となつて目に見えるようになるのです。

私達がこの世に生まれ出る縁となるものは、過去における自分の生き様です。過去の生き方の全てが縁となつて、自分の個性や人生を作り出し、そして今の生き様がまた新たな縁となつて、次の自分、次の人生を作り出してゆくのです。

そしてまた雲に隠れたり現われたりしながらも、太陽そのものが消えてなくなつてしまふ事のない様に、私達も生きたり死んだりしながら、私そのものの本体は、決して消えてなくなることはありません。

今生ではこの肉体衣を着ての人生ですが、生まれ変わるたびに、私達は真新しい肉体衣に着替えます。

それはたとえば、海にもぐる時には潜水服を着ていた人



が、海辺のホテルで食事をする時には、その潜水服を脱いで、ホテルでの食事にふさわしい服に着替えるように、次なる人生にふさわしい肉体衣を身に付けます。

しかし服はあくまでも服にすぎず、肉体衣を着ているのは私の命です。

命自身、本当の私そのものは、当然誰の目にも見えません。見えないけれど、私は私の服を着て、今、この個性を持った自分としてここに現われ、生きているのです。



### 向上浄化の日々

私達は、幸福になるために一番ふさわしい肉体衣を身に付けて、生まれてきます。

そしてその肉体、その環境でなければ学習できない様々な体験を通して、自分の本体とは何かという事を学びながら、完全無欠の自分を目指し、日々向上浄化し続けているのです。

今はまだまだ濁りの多い状態で、失敗も多く、間違だらけの人生ですが、どの人も皆、今まさに向上浄化の真最中にいる同士であり、兄弟であり、仲間です。

そしてこの環境での学びが終われば、誰もがその肉体衣を脱ぎ捨てて、またいつの日か新しい肉体衣を身に付けて、生まれてくる事になるのです。肉体衣を付けて生きている今の姿は、一人ひとりが夫々の個性を持っており、決して完全完璧な存在ではありません。

しかしその一人ひとりの存在は、あの光り輝く一本の太

陽光線であり、また虹の中の一つの色のようなものです。

そしてまた太陽の光が、どの光も太陽から出て太陽そのものを表わしているように、私達が大生命である神を土台に生まれてきた神の子であるということは、いわば自分は神そのものでもあるということが言えるのです。

全ての人が神の子であり、神そのものを表わす尊い存在であるということです。

煎じ詰めれば、神以外、自分以外というものはなく、一切全てが自分自身であるということです。

「天上天下唯我独尊」とお釈迦様が言われたのも、正にこの事であり、自分だけが尊い存在で、他のものは全然尊くないというような事を言われたではありません。天上天下全てが自分であり、全てが尊い存在であるということです。

雨が降っても、太陽は雲の上にあり、いつも変わらぬ温かい光を投げかけています。いつか太陽光線が雲間から射すこの美しい光景を目にした時には、どうぞ今の話を思い出し、いつも生き続けている自分、そして本来の自分は何ものにも代えがたい、本当に本当に尊い存在であるという事を、どうぞその光の中に見出して頂きたいと思えます。

編集発行人

もとはこちら会

資料編集部

北原友也

専用HP

<http://www.motoha-kochira.com>

mail: [data3@motoha-kochira.com](mailto:data3@motoha-kochira.com)